

樹里安だより

1997年
4 月
VOI.2



オオカンザクラ 大寒桜（安行寒桜）

川口市安行の田中一郎宅にあったものを、同じ安行に住む小清水亀之助がもらいうけ接木したものが最初で、このオオカンザクラである。はじめ、船津金松がアンギョウカンザクラと名づけて発表したのが、その後相関芳郎が、オ

オカンザクラと命名。一方の親がカンヒザクラであることは確実。もう片方はおそらくオオシマザクラであろう。

花期 3月上旬から4月上旬

日本のサクラの種・品種マニュアルより

興禅院境内のスタジイ

木村 四郎



指定保存樹のなかではケヤキ・イチヨウに次いで多いのが椎の木すなわちこのスタジイである。新潟県から福島県あたりを北限とする暖地性の木である。スタジイとツブラジイを合わせてシイノキとよんでいるが、イチヨウとともに成長は早い方である。秋にはドングリがなるが甘味があって仲々うまい。昔の人はこれを食用として重宝したという。

「家にあれば けに盛る飯を草まくら、

旅にしあれば椎の葉に盛る」万葉集巻二

あまりのみこ

有間皇子が紀州へ連行される途路に詠んだ歌だが、飯をもるほどの大きさはなかならうと思うのだが、それでも手のひらほどの大葉が混じっていることがよくある。そんな葉を使ったのかもしれない。暖かい海岸近くに多くみられる樹種だというのが、この関東地方の風土にも適した種類の一つであったとみえて、大木が各地に残っている。

去年秋に訪れた目黒の自然教育園（昔の白金長者の屋敷跡といわれる）は人の手を加えない貴重な場所で、往時の武蔵野の風趣に浸ることができる都内唯一の場所である。特に圧倒的な迫力で、天をも覆い尽くす勢いで枝葉を拡げるスタジイの姿は壮観である。魂を揺さぶられるような感動をすら覚えたものである。この川口にもかなりの大木が残っているが、今日はそのうちの興禅院のスタジイを訪ねることにした。

曹洞宗興禅院。鳩ヶ谷の122号沿いの崖っ

ぶちにある法正寺（ここにもスタジイやクスノキの大樹がある）の末寺で、室町時代は信長のころの創建というからおよそ450年を経た古いお寺である。白梅・紅梅が匂う参道を歩いて山門を入ると、左手に墓地を越えて5、6本のスタジイが茂っている。それぞれ相当な太さであるが、指定のものは真中奥のもので幹周り3.4m高さ22mもある。

根本すきまに置いた石灯籠の受台か何かを2個咥えている。根元の部分は空洞になっているらしいがどの程度なのかは判らない。上部西側へ張り出した太枝は枯れ口を見せて折れている。中央、天に向かった芯の先もすでに無い。だが、この木の特徴である生活力の旺盛さはさすがである。枝が折れ、幹が腐っても、肌をはがれても、たてに割れた幹肌の外皮が、荒々しい形相で天に向かって立っている。堅い葉は、やや黄色味を見せる裏側のせいか、遠くから見ると黄土と緑青を混ぜたややかたい黄緑の葉色をてかてかと光らせている。葉が厚いのと多い為に影の部分黒々としてしまう。公園等では、やや暗い感じを与えてしまうのが惜しい。

この興禅院では、南側が明るい墓地なので、これらのスタジイは遠くから見ると限りは明るい感じに映るのである3・4年前の大雪でかなりの枝折れがあったが、それらを感じさせない茂りをみせて輝いている。木の根を痛めないため現在、墓地区画の移動整理中である。

老椎の照り葉のひかり春浅し

我が国で、緑化樹として利用されている樹木は、およそ300種余りあるといわれています。その中から代表的なものを、それぞれの特徴によりわけてみました。

花の美しい木

樹木の花の美しさは、古くから人々の心を惹きつけてきました。
ここでは、このような我が国の代表的な花木を集めてみました。



大紅椿

○花色のいろいろ

紅・赤色系

カイドウ、サツキ、モモ、サザンカ、ツバキなど

白色系

クチナシ、コデマリ、コブシ、ユキヤナギ、バイカウツギなど

黄・橙色系

ビョウヤナギ、サンシュユ、レンギョ、ロウバイ、キブシなど

紫・青色系

アジサイ、シモクレン、フジ、クロバナロウバイ、フジウツギなど



ユキヤナギ

○花期の長い花木

(始めに花が開花した時からその植物の花が終了までの期間を花期とする。)

4週間

ボケ、レンギョ、サザンカ、ベニウツギ、バイカウツギ、ハギ、キソケイ等

5週間

ヤブツバキ、ゲンカイツツジ、シャクナゲ、ガクアジサイ、ムクゲ、カンザクラ等

6週間

サンシュユ、ヤブツバキ、クロバナロウバイ、タイサンボク等

7週間

ザクロ、ツバキ、キョウチクトウ等

8週間

ウメ、フヨウ、テイカカズラ等



ロウバイ



アジサイ



緑花の手びき シリーズ 1

植栽する樹木や場所が決まったら、こんどは植付けです。植付けのしかたが悪いとせっかく植えた樹木が枯れてしまうということにもなりかねません。特に深植えにならないよう気をつける必要があります。

植 穴…樹木の鉢よりやや大きめにする。

肥 料…樹木の根が直接肥料にふれないようにする。堆肥のような遅効性の有機質肥料を用いる。

根巻き…根巻きの縄は必ず切る。

埋込み…埋込みの方法には水極（みずぎめ）と土極（つちぎめ）があり、通常は水極とするが、松類は土極にするのがふつうである。

※水極は、植穴に土を戻しながら、水を充分に注ぎ、土が鉢の周囲に密着するように棒で泥をよくつくという作業を繰り返して埋め戻すのに対し、土極は、水を使わずに棒で土が鉢に密着するようによくつきながら、埋め戻す方法である。

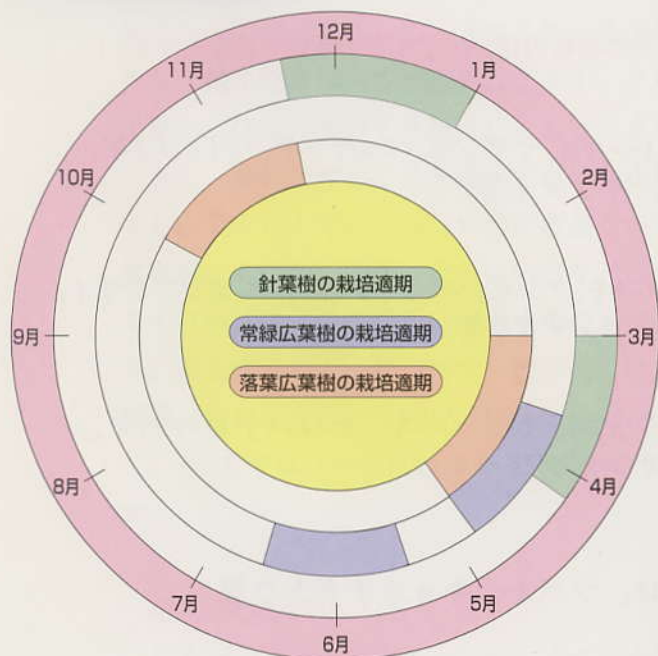
水 鉢…土を埋め戻すのが終わったら、鉢の外周に沿って浅い溝を掘るか、土を盛りあげるかして水鉢をつくって充分に灌水する。

植栽時期のきめかた

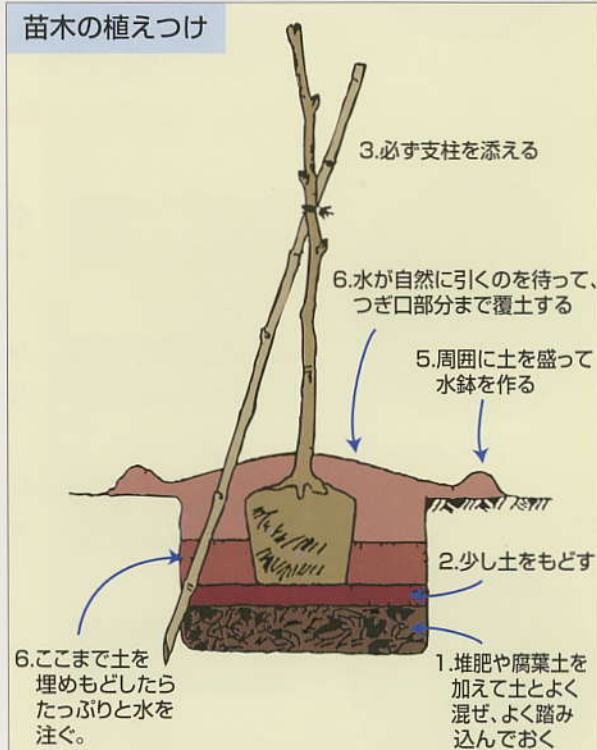
植栽の時期は、一般に樹木の成長が止まる頃から、発芽前までの休眠期がよいとされています。（ただし、厳寒期は避ける方が無難です。）

また、常緑広葉樹の場合は、新緑の固まる梅雨期も適しており、樹木の移植は、できるだけこうした適期に行いたいものです。

樹木の植栽適期



苗木の植えつけ



※この表は、関東地方を標準としたもので、東北、関西地方では約1ヶ月、九州地方では約1ヶ月半、北海道地方では約2ヶ月ずつ、それぞれの気候に合わせてずらして考える必要があります。

サクラの枝は切ってもよいか

「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」の諺があります。そのために桜の木は絶対に切ってはいけないものと信じている方が多いようです。基本のルールどおりに行えば差支えないだけでなく、優良な木を育てるためには、むしろ積極的に切らねばならないのです。桜の枝を切る要領は他種と全く変わらないが、次の点を特に注意して行うことです。

(1) 大木の切りつめ、枝おろし

大木の枝を切る場合には他の種類も同様であるが、同時に全体の根切りも平行して行い地上部と地下部の生理バランスの平衡を保つよう処置する。時期が悪い場合でもこの点は必ず守ります。

(2) 枝抜き

混み過ぎた枝は見苦しいだけでなく、樹にとっても生育を阻害しているので必ず枝抜き（間引き）剪定をおこないます。その時に切る枝の基部は全く残さず幹部からえぐり取る

くらいに切らなければならない。切口が大きければゆ合剤を塗って乾燥を防止する必要があります。

(3) 切りかえ剪定

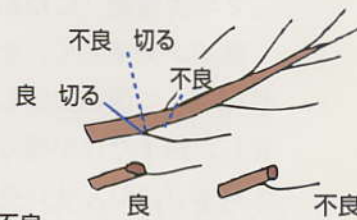
伸びすぎて大きくなった枝を小さく縮小する時も簡単に切りつめるのではなく、その枝の下方にある小さい外枝（小枝の場合は外芽）を残して切りかえてやるが、この場合も外枝の伸びる角度に合わせて、基部を斜め切りにすれば美しく見えます。



2. 枝抜き（間引き）



3. 切りかえ



サクラの枝を切ったとき



太めの枝を切るときは、必ず枝元で切り落とし、切り口にはゆ合剤を塗って保護する



植物用語解説 シリーズ1

○草本（そうほん）

維管束の本部があまり発達しないで、多肉で柔らかい草質の茎をもつ植物を草本と呼びます。

○1年生植物（いちねんせいしょくぶつ）

種子が発芽すると、その年に開花結実して、冬ごろには株全体が枯死し、種子だけが残る草本のことです。一年生草本（いちねんせいそうほん）ともいいます。

このタイプの植物は、開花に低温を必要とせず、そのうち多くはある程度植物が大きくなれば開花します。

園芸的には、1年草と呼ばれています。

○2年生植物（にねんせいしょくぶつ）

種子が発芽して、その年には開花せず、翌年になって開花結実して冬までに株全体が枯死し、種子だけが残る草本のことです。2年生草本（にねんせいそうほん）ともいいます。

また、秋に発芽し、冬を越して春に開花結実し、実際は1年かからないのが普通なので、越年草（えつねんそう）ともいいます。このタイプの植物は冬の低温に遭遇することにより、開花するのが一般的です。園芸的には2年草（にねんそう）と呼び、1年草とあわせて、1・2年草（いちにねんそう）といえます。

○和名（わめい）

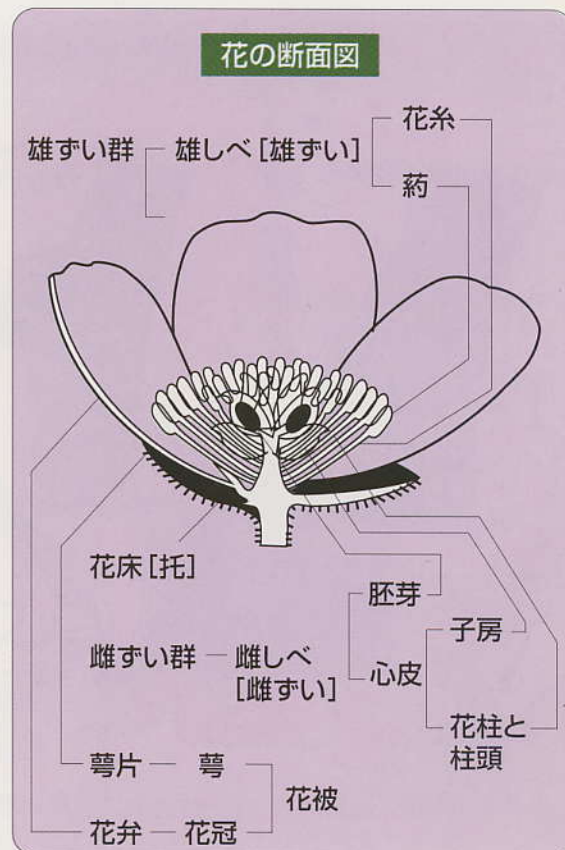
日本での普通名を和名といい、カタカナ表記を行います。

特に日本原産の植物の場合、自然発生的に

つけられたものが多く、植物学上の同じ種に別の名前がつけられたり、別種に同じ名前を与えた場合もあります。また、人間生活に密接に関係がある植物では、その地域ごとに多くの名前がつけられ、その地域の人でないと理解できないことが起こります。

○標準和名（ひょうじゅんわめい）

共通して使用することができる和名を1つ決め、それを標準和名といいます。一般に、和名といえばこの標準和名を指しています。標準和名以外の各地でそれぞれにつけられている和名を、別名（べつめい）や、俗名（ぞくめい）、地方名（ちほうめい）などと呼んでいます。





川口緑化センターの主なイベント報告(平成8年度)

- 第1回 彩風展 4/5~7 樹形もみごとなさつきの盆栽108点を展示。
- 第42回 春の安行植木まつり 4/20・21 「植木の里あんぎょう」を代表する植木、鉢植等の大展示販売。各種イベント、園芸相談など15,000人以上の来場者でにぎわう。
- ツツジ・シャクナゲフェア 4/27~29 30年以上の樹齢を持つ西洋シャクナゲの展示等。
- 蕎麦もやし・手打ち蕎麦教室 6/1・2、9/15・16 蕎麦の打ち方や種まき体験など。
- コニファー展 6/15~18 コニファー(針葉樹)のさまざまな色彩と種類を紹介。
- 緑花資材フェア 6/27~30 ヨーロッパ直輸入の緑花資材を始め園芸用品の展示販売。
- 押し花額展示会 7/9~9/1 押し花額作品展やはがき、オリジナル押し花うちわの制作体験。
- 造園CAD講習会 8/20 造園設計の近代化を図るための技術者養成。
- 有用植物と飲料水フェア 8/24・25 ビールの原材料の製造過程等を紹介。
- 緑の学会 9/7 山本光二氏による樹木医療の体験等を講演。
- コチョウランとバイオテクノロジー展 9/13~16 バイオテクノロジー栽培技術のパネル展示とコチョウランの展示販売。
- 川口市保存樹木写真展 9/4~25 保存樹木写真のパネル展示。
- 第7回川口物産観光展 9/28・29 川口市の特産品である鋳物工芸品から銘菓等の展示販売。
- グランドカバーフェア 10/4~7 都市植栽空間を彩るグランドカバーの紹介。展示販売。
- 第43回 秋の安行植木まつり 10/10~13 植木・鉢物等の大展示販売。各種イベント。
- 豊年まつり 11/2・3 小品盆栽と生活の骨董市、新鮮野菜や有機栽培梨販売等。
- フラワーデザイン展と講習会 11/23・24 四季折々の多彩な花々を優雅にアレンジメント。
- 歳末・緑花で贈答品フェア 12/1~30 花の王様ランやシクラメン、ポインセチアなどの展示販売。
- 松竹梅・縁起植物展示販売 12/9~1/20 多数の縁起植物、千両、万両、春の七草の展示。
- 新春緑花祭 1/3~20 緑花物の初売りと新春福引抽選会、甘酒サービス等。
- 梅の展示販売 2/8~28 梅の種類の紹介と展示販売。
- 川口緑化センター
道の駅「川口・あんぎょう」一周年記念フェスティバル 3/28~30 各種イベント。

※この他にも、各種園芸教室や産直販売などを実施しました。平成9年度も多くイベントを行いますので、ご家族揃ってご来場下さい。



緑化アラカルト

安行植木のおこり

安行植木が栄えた理由

安行台地（15～30m）といわれ、洪積台地の起伏が多く、日陰の木から日の当たる木までいろいろの樹木ができる。

地理的条件が大消費地、江戸・東京に隣接していたため。

江戸時代は、その郊外の巣鴨・飛鳥山・桜木

・田端・染井等が野菜の産地であり花・植木の供給地であった。

その後方の供給基地として安行が栄えた。

流通過程を握るとともに、江戸・東京の植木市場或は全国の植木市場に積極的に需要開拓をした。

ご存じですか 川口名産

ハマボウフウ（浜防風）、海辺がふるさとの野菜である。刺し身のつまに使われるセリ科の多年草で、葉は、濃緑、茎はすらっとしていて紅紫色の色合いを持ち、香りを放つ野菜である。

若い葉柄が宮中の晩さん会、高級料亭などの日本料理に必ずといっていいほど使われている。

このハマボウフウは江戸の色があり、日本文化の味わいを持っている作物である。（栽培の発祥地が川口の本曾呂地区で、江戸時代より今日に至るまで作り続けられ、国内でまとまった産地として有名である。）



ハマボウフウは茎の下部を針でさいて水に漬けると錨（いかり）のように巻き上がった形になる。そんな姿で刺し身のつまにしたのが古来からの方法である。



発行日
9年4月1日

発行
財団法人 川口緑化センター
川口市安行領家844-2
TEL.048-296-4021
「道の駅」川口・あんぎょう